

芥川だより

編集発行人 下村嘉明

発行所 着物から服を仕立てます 梵

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870

発行日/2007年3月20日

ご希望の方にはお送りします

お気軽にお問い合わせ下さい。

e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp



夜道

家に帰るには、杉の木立に覆われた一本の細い道を歩かねばならなかった。最終電車で無人のホームに降り、家路につく。人家が点在する村を通り過ぎて、谷に架かる橋を渡ると、一軒の家もなくなる。そこから外灯のない木々に覆われた道がつづく。小学生のときから通いなれた道であっても、雲が空一面を覆う夜に通るときは、光のまったくとどかない闇の世界に踏み入る覚悟がいる。まわりの木立はもちろん、自分の足元、手先すらみえない底なしの暗闇に入りこむと、左右前後の感覚が失われてしまったような錯覚に陥る。確かなたよりは砂利道を踏む靴の音である。道を外れれば、靴の踏む感触と音によってわかる。ゆっくり歩かなければ道を外れて怪我をするかもしれない、そう思いながらも、闇のなから得体の知れない物の怪があらわれるのではないかという恐れから、一刻も早く通り抜きたい気持がはやる……。◆半時間も歩くと、狐塚あたりにさしかかる。何かに化けた狐が後ろにいる気配を感じる。直ぐ後ろに付いてくるような足音が聞こえる。怖くなって走り出す。しばらくして走るのをやめて、早足で歩く。化け狐の足音が次第に近づいてくる。追いつかれたと思ったとき、とっさに立ち止まって、振り向きざまに「こら

っー」と叫びながら思いきり鞆を振りまわす。鞆は空を切り、吸いこまれそうな漆黒の闇だけが冷たく広がっていた。◆坂を登り小高い丘を巻くように進んだとき、消防ポンプ小屋に灯る赤電球のかすかな光が遠くに見えた。押しつぶされそうな心細さから少し解放される。村の家々からは、寝静まっているのか明かりは洩れてこない。村の匂いにつつまれたとき、私の心は安堵で満たされた。(嘉)

芥川商店街歳時記

今月の予定

- 第四回 楽の会 亀屋寄席 (笑福亭 銀瓶) 割烹旅館 亀屋
5月27日 (日曜日) 午前10時半開場。11時開演。会費、2500円、(お料理込み)
- フィナンシャル・プランナーによる保険見直し相談会 (無料)
毎週土曜日・日曜日 (要予約) 保険の身近な相談所・総合保険事務所 ☎0120-801-836

☆☆☆ 投稿記事 随時大募集!! ☆☆☆

深奥幽玄 手談の交わり 囲碁で豊かな人生を!



日本棋院高槻支部

芥川囲碁サロン

(株)入谷商会経営

日本棋院 棋士 谷村義行八段による

大盤解説 毎月第二日曜日 午後2:30より

指導碁 毎月第二日曜日 午後4:00より

高槻市芥川町2-10-11(芥川商店街)

TEL・FAX 072-682-0403(代)

「早寝早起き、三文の得」という。読売新聞本社の社長さんのメッセー
ジには、「朝ご飯」とある。でも現在
は死語に近いと言う人がいるが、そ
うだろうかといぶかしく思う私も、
うなずかざるを得ない。

歴史の散歩路、西国街道を更に西
へと墓参りに一心に歩いていたら、
突然、自転車のリーン・リーンの音
に気付く。荷台に乗っている子供が
「おばちゃん、おはよう」
と声をかけて、にっこり笑ってくれ
た。私も、

「お早ようさん」
と元気な声で返した。よく見れば、
私のひ孫くらいかな。母親もにつこ
り「すみません」。

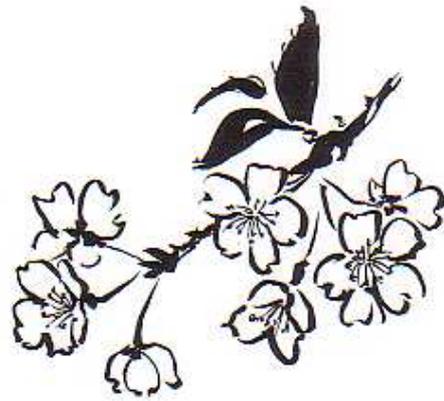
通り過ぎてゆくこの親子は、きつ
と何でも言い合える家族であり、温
かい雰囲気のある家庭なのだろう。

始めよければ終わりよし、終わり
よければ次もよし、三文の得かな。
一日の始まりをいい気持ちでむかえ
られた。

「生かされて、生きる命を大切に」
という貼紙に目がすいつけられた自
分は、いま何を考えていたのだろう
か。
墓前に手を合わせて何を言ったのだ
ろうか。

あれや、これやの事態に振り回さ

れたって、自分のペースで生きてゆ
くより仕方があるまい。買い物をも
モした紙が、一日の予定表と机の上
で温和(おとな)しくむかえてくれた。



わが世代

私たちが忘れずに心に残っている
のは、「事実」そのものより生活して
きた時々の「感情」である。ともに
語り合いたい、そして思い出とい
う形でしか表現出来ないこと。

いま私は自分の年齢を感じ、歩み
を記録しようとしている。しかも、
それを何らかの形で語ることによっ
て、同世代の歴史とでもいうべきも
のが描ければと考えている。

大正十五年Ⅱ昭和元年(一九二六年)

大正十五年生まれはびりつけつの
世代である。たとえば、「ハナ、ハト、
ママ」ではじまる小学国語読本で学
んだのは私たちが最後である。昭和
になると「サイタ、サイタ、サクラ
ガ、サイタ」に変わる。大正十五年
は昭和元年でもあるから、考え方に
よっては、昭和世代のトップだと思
えば腹の虫もおさまる。

卒業までの六年間はおなじ級友と
机と共にしたので、いまだに、クラ
ス会がつづいている。そして、顔ぶ
れが少なくなってきた。残っている
のは、さすがという頑固者。まだま
だ若いという、うぬぼれでもある。

私たちの学年は大正生まれと昭和
生まれの両方にまたがっていた。大
正十五年生まれが約三十人、昭和二
年生まれが約十人であったか。その
間に昭和元年生まれがいるはずなの
だが……。大正天皇が亡くなられた
のが十二月二十五日であるために、
昭和元年はたったの七日間である。

昭和生まれと大正生まれとは、イ
メージに差がある、
クラス会の話題の中心となって花
が咲いてゆくのである。そして集ま
って、しゃべることを楽しみにして
いる。まだ、まだ生ある限りつづく
であろう。

立春

昔は衣食足りて礼節を知る。
今は衣食足りて礼節を捨てる。
忘れてるといふのか。

人みな、自分流に生きているとい
う感じ。暦が新しくなり、もう三月。
桃と梅が競うように咲いたら、デパ
ートは、おひな様で満開。

月日が立つのは夢の中、こちらは
ひたすら字が見えなくて何かとご厄
介なこと。

正月以来、ニュースはひどすぎる
事件を、次から次へと報せてくれる。
何とイヤな時代になったことかとぼ
やく。いったい、何故そんな世の中
になってしまったのかと茫然として
しまう。

いえることは、世の中がこんな形
にずるずる移行したのも私達がすべ
て片棒かついでいるのではないか。
年老いたからといって、手をこま
ぬいて見ていることはない。いわせ
てもらおう。

人間の歴史の中には、大勢の人達
が犠牲になって沈んでいった人のこ
とを思い出そう。

私にも、心に立春がやってきた。



消えたパーティー

梵店主

あらすじ

大学に入学したよっちゃんは、山岳部に入り、初めての合宿に参加した。冬の剣岳・早月尾根で吹雪の夜を忍び、重いボツカにも耐え、幸いにもビールにありつけたのであった。

頂上に向かった本隊・先発隊との交信をすませ、ほろ酔い気分分で伝蔵小屋をあとにする。東京の大学のパーティーが先に下っていったので、そのあとを追いかたちとなった。ところが、しばらく下っても彼らの姿が見えない。「おかしい、おい伝蔵さんに伝えてこい」と四回生がいうので、よっちゃんは小屋に引き返し、伝蔵さんに伝えた。伝蔵さんは急いで小屋を飛び出し、「谷筋に下りたんやろ、雪崩にやられる」といいながら、彼らのトレースを探しはじめた。

ここ数日の降雪で積雪もかなりあり、今日の好天で気温が上昇し、雪崩の起きる条件は揃っている。よっちゃんの立っている尾根筋でもいつ崩れるかわからない。谷筋に降りたとすれば、傾斜もきつくなり雪崩にやられる可能性が高くなる。しかも、陽の光がよい昼下がりである。雪は溶けて腐りは

じめていた。

よっちゃんたちはそんな心配を胸に、雪の斜面にかすかに残る足跡を探した。

消えた大学パーティーのOB会に四回生の兄が在籍している。よっちゃんの大学山岳部とも昔から交流がある。あの老いた先輩は「あそこはお公家さんの学校やからなあ。わしらとはちがうで」と昔を懐かしんでいた。

幾度も上り下りをくり返して、雪面に目をこらす。なかなか彼らの踏みあとが見つかからない。どこからルートを外れたのだろうか。半ばあきらめに近い思いがよっちゃんの頭をかすめたと、伝蔵さんが「ああ、あった。これや、ここから下ってるわ」というや、トレースを追いかけるように、谷に向かって急斜面の雪面を駆け下りていった。

かなりしてから、伝蔵さんが息を切らせて登ってきた。「見つけたわ。もうちょっとで雪崩にやられるとこだった。助かってよかった」。安堵の気持ちと共に、救助の手助けができた誇らしげな思いのよっちゃんであった。

見つけた以上、早くテントに戻らなくてはいけない。ふたりは走るようにベースキャンプに下った。テントに着くなりトランシーバーを取り出しスイッチを入れる。

先発隊と本隊両方から無事剣岳に

登頂し、下りてくると交信があった。熱いコーヒーをつくって待つ。彼らがテントに帰りつくまえに、「マージャンとビールのことはいうなよ」と四回生に口止めされた。

その夜は登頂を祝い、少ない酒で乾杯して騒ぐ。明日は下山するから、少しでも荷を軽くする必要がある。食料はどんどん食べる。久しぶりに満腹になって寝た。

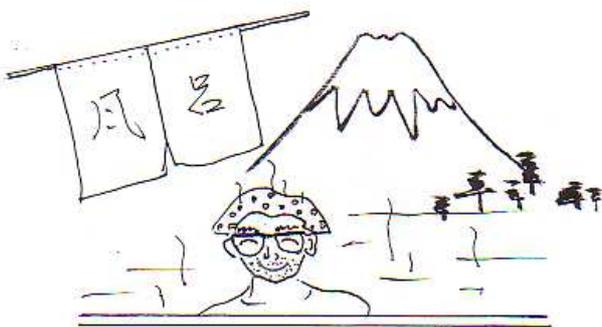
最終日はいつものように四時エッセン。素早く腹ごしらえしてから走るように早月尾根を下る。よっちゃんの荷物はだいぶ軽くなり、バテる心配がない。馬場島からのマラソンもトップを争うくらいに速く走ることができた。

伊折村に着き、電話を借りてマイクロバスを手配する。車中ではみんな寝ながら富山に向かった。富山に着くと、さっそくなじみの飯屋に行く。先輩がおごってくれるのだ。そのとき食べたご飯は、とても言葉ではいい表せないくらい美味かった。飯の後は風呂屋に行く。

この数日の山行がよっちゃんをたくましく大きくしたのだ。自信をつけた彼はそれから、山の魔力に魅せられたかのように、北海道のど真ん中、冬の大雪山に行くのであった。

〈余談〉

よっちゃんはその後、元リーダーの四回生と山行きを共にしたことはないが、いつしよによく酒を飲んだ。京都・四条河原町の近くにあった行きつけの「たかのす」で、湯豆腐をあてに杯を酌み交わし、何度もご馳走してもらったものだ。ある山行の帰りにその先輩の家を訪ねたことがあった。湘南の海岸べりにベランダをもつ洒落た邸宅は、山での先輩からは想像できない雰囲気をもっていった。石原裕次郎を思わせる風貌は湘南海岸で育ったためだったのかと納得した。次号からは、冬の大雪山縦走です。



食の楽しみ

植物状態のお袋は、口でものを食べたり飲んだりすることはできない。栄養摂取は胃瘻(いろう)によっている。

胃瘻というのは、腹壁から胃に挿入したチューブを通して栄養剤や水分を直接胃に注入する装置である。現在のようなかたちが開発されたのは二十数年前で、この十年で急速に普及したらしい。脳疾患や食道癌などで口から食べ物を摂取できない人が胃瘻という方法で栄養を摂るのである。胃瘻以外の方法としては、鼻からチューブを食道に通して栄養剤を注入するというやり方がある。自宅で介護するには胃瘻のほうが簡便と勧められて、お袋は三年前に造設してもらった。お腹にチューブが埋め込まれた状態はやはり奇異に感じる。だが胃瘻は、生きる上で不可欠な栄養素と水分を体内に取り入れるための大切な門だ。

この新たにつくられた門から体内に注がれる栄養剤は製品名をエンシユアといって、あらゆる栄養素がバランスよく含まれた濃厚な液体である。調理した食事は、好き嫌いがあるので偏食気味になるし、食欲のないときは食べないこともある。エンシユアを飲んでおけば、栄養がかたよる心配はない。

エンシユアにはバナナ味、コーヒー味、バナナ味などがある。食事をエンシユアに代えて元気を取りもどした人、白髪が黒くなってきた人もあるという。お袋の場合はだいぶ太った。

胃瘻からの栄養摂取は食べる楽しみがない。食べるということには、食のうまみを味わう楽しみもある。いまは過剰とも思える健康志向があるが、健康に悪いとわかっていてもうまさには勝てない。食の楽しみをうばわれるつらさは僕の想像を超えている。口で食べられない状況になったら、食わずにそのまま逝けばいいと思う。それは甘い考えかもしれない。お袋はどう思っているだろうか。

お袋は料理が好きだった。テレビや雑誌から得た情報を参考にして、自分のレシピを工夫していた。うまい料理で人にもてなして喜んでもらうのが好きだった。だが、本人は食べることにさほど頓着しない。好き嫌いは当然あったし、おいしいものを食べて幸せな気分になることもあっただろうが、食べる楽しみの優先順位は低いほうにあったように思う。食事をとるのも不規則だった。一日一食のときもあれば、たくさん食べることもあった。ひどい頭痛もちで、頭の痛いときは何も食べられない。牛乳一本で一日を過ごすこともあった。

口から食べられなくなっても、あまり気にとめないかもしれない。いまは三食、決められた時間に十分な栄養を摂っている。生活のリズムができて、以前よりよほど健康的な生活を送るようになった。

口で食べられなくても、味覚は失われていない。毎日口の中を掃除するのだが、うがい薬をしみこませたブラシで舌をこすると、苦味を感じて表情をゆがめる。悲しいことにそれ以外のものを味わうことはない。他の五感はどうだろうか。

僕の顔をにらみつけるように見すえることがある。ところが、ゆっくり顔を横にそらしても、瞳はそのまま動かない。見えていないのだ。この一年で視覚機能はかなり衰えた。顔を触ると嫌がったり、足の裏をくすぐると痙攣したように足をふるわせるので、触覚は部分的にはある。寒さ暑さも感じているようだ。嗅覚はあったとしても反応はない。聴覚は確実にある。呼びかけても反応はないが、ちゃんと聞こえている。だから、できるだけ話しかけ、モーツアルトのピアノコンチェルトやダイベルティメント、お袋の好きだった加藤登紀子の「百万本のバラ」を聴かせている。

ものを見る感覚はほとんど消えた。外部からさまざまな種類の情報を取り

いれる五感の扉を、少しずつゆっくり閉じはじめているのかもしれない。お袋は、好きな絵を描くこともできない、本を読むこともできない、食べることも話すこともできない、万事人の手を借りなければ生きていけない、そんな状態であるが、八十年の歩みを見ると、晩節のいまがいちばん安らいでいるような気がする。「あんたたちに面倒はかけないからね。逝くときはポツクリ逝くからね」といつていたときには、想像もできない現実が待ち受けていたのだが。



ドイツの姫君 ①

梵店主

「私の前世は、日本のお城のお姫様だったのよ」

と語る老婦人は、フィンランド生まれのユダヤ系ドイツ人。ところはドイツ・デュッセルドルフの片田舎、山あいにある、白亜の古城を想わせる豪邸に彼女は住んでいた。

邸内の池には日本から取り寄せたというカモが数羽泳いでいる。ガラス越しに見える池の様はまぎれもなく日本庭園のそれであり、京都の風情ある庭園を覗いているような錯覚におちいってしまう。

彼女との出会いは偶然であった。ベルリンの壁崩壊少し前、デュッセルドルフのジヤパン・ウィークという物産展に出店した時、彼女が客として店に訪れたのが最初である。ドイツ人と日本人は好みが似ている、これが初日の感想であった。

次の日にその老婦人は若い女性を伴い店にきた。ドイツ語は学生るとき習ったが、完全に記憶から消えている。にわか仕立ての勉強をして行ったが、会話にはならない。仕方がないから英語七分、片言ドイツ語三分で販売を始めた矢先に、彼女が来た。

彼女の商品の扱い方や選び方、その気品あふれる身ごなしに私は魅了されてしま

ったのだ。値札を見ることなく丁寧に選んだ六点は、出品した中で最高のものであった。

選び終わると伴の女性に何かささやいた。伴の女性が英語で私に、「これだけ買います。後で取りに来ますから包装しておいて下さい」と言った。

「ありがとうございます。ところで失礼ながら、おたずねしたいことがあります、ご婦人に」

と問いかけると、老婦人は英語がよく判らないらしく、伴の女性が通訳をしてくれた。

「質問はなんでしょうか？」

「私は日本から販売のために来ました。貴女の商品の選び方は大変素晴らしい。よほどの日本通であると思われるます。さぞかしコレクションされているものはすばらしいに違いない。私は二週間後には日本に帰りますが、もしよければ、それまでに見せてもらえないでしょうか」

その願いにたいして、

「あとで返事します」

と言い残して老婦人は去っていった。

次の日、伴の女性が来られて、

「母が貴方に、次の日曜日の三時に自宅に来て下さいと言っておりますが、ご都合は如何ですか？」

と聞かれたので、

「はい、参ります」

と答える。すぐに通訳を探さなければならぬ。それで、来店した日本人客に事情を話したところ快諾してくれたので、その人とともに老婦人の邸宅を訪問することになった。

私たちは、約束の時間に彼女の豪邸を訪れた。ドイツ語、英語、日本語の飛び交う私たちの会話はたいへんはずんで、一時間のつもりが大幅にオーバーして二時間あまり続いた。

庭園も美しいが、邸内のしつらえがまたすばらしい。李朝時代の螺鈿（らでん）の箆笥が壁面を埋め、書棚にはアジアの美術書が並び、能や歌舞伎、茶道などの本が一角を占める。照明は薄明かりの間接照明。加湿器が湯気を上げるかすかな音以外は静まりかえっている。隣の部屋では主人がチェスを楽しんでいる。

この邸を訪れた日本人は私で三人目だと言う。ソニー創業者の盛田昭夫さん、日本大使に次ぐ訪問者が私だと。

「えらいとこに来たなあ！」

ドイツ語、英語が話せなくても、何も恥ずかしいことはない。しかし、日本の文化について日本語で話せないことほど情けないことはない。私は、自分の無知無学の恥ずかしさを心底味わったのである。能や歌舞伎、茶道、桂

離宮などの日本建築について、かなり突っ込んだ話が展開したのだ。



芥川の西国街道

福嶋 努

「子育て地藏」の前から東の方へ、西国街道を進んでいく。しばらく行くと、左側にモダンな洋風の白っぽい建物（バレエのレッスン場）が目に入る。その敷地の角を左に曲がると、お寺の山門が現れる。どっしりとしていて、立派な山門である。相当に古めかしい。

この寺院は、浄土真宗西本願寺派の教宗寺で、門の左前に展示されている「芥川宿絵図」（一七三四年に作成された絵図の写し）には、芥川宿本陣とともに数少ない瓦葺きの建物として大きく描かれており、昔からの格式ある寺院であることがよく分かる。その景観は、当時も今もあまり変わらないように思える。

門の右前のボードには、寺を訪ねてきた人に語りかけるかのように、簡潔なことばが毛筆で記されていた。

『光寿無量』

今日もまた

まつさらな一日が

はじまる』

今日の一日というのは、昨日までとつながった一日であり、又、明日以降にもつながるのは間違いないことである。

でも、今日の一日は今日の一日であって、まつさらな今日という日が始まる。そのことも確かなことである。前日、大きな壁にぶつかり、落ち込んだままでその日を終えたとしても、その翌日には、例え小さなことであっても、その日の目標が生まれ、その日の希望が湧いてくる。昨日にはなかった新しい目標、新しい夢がある。仏様のお陰なのでしょう、一夜明けると、人の心の中に新しいものが芽生えてくるような、そんな気がしてくるのですが……生きる元気を与えてくれる有り難いことばに接し、私は、納得した気持ちで、寺をあとにした。

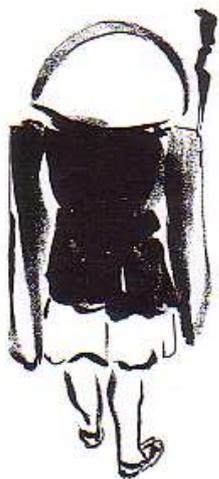
西国街道へもどって、再び東の方へ歩みだした。このあたりは、昔、芥川宿のあったところである。宿駅が置かれ、一里塚が設けられた芥川宿の規模は、東西およそ二百十メートルで、本陣をはじめ旅籠屋などが建ち並んでいたという。京都と西国を結ぶ街道、歴史に名を刻む人物や、多くの旅人が行き交い、参勤交代の大名行列や、金毘羅もうでに向かう人々にぎわったという西国街道。

明治時代に入ると、鉄道（JRの前身）が開通し、西国街道の重要性は低下していく。でも、地方唯一の国道として、通行人は、少なくはなかったという。

やがて、昭和に入り、大阪、高槻、京都間に電車が開通、新しい国道（二七一号線）が出来上がり、西国街道自体は、国道とはほど遠い、ローカルな、ごく普通の生活道路に生まれ変わっていった。

現在の西国街道は、このあたり―芥川町四丁目、三丁目あたりでは、歩行者や自転車の往来がほとんどである。自動車は、あまり沢山通らない。ここを通る自動車は、離合のポイントをつかんでおり、ゆずりあいながら、ほとんどスピードで進んでいく。この街道は、歩行者、自転車、自動車が、不思議なくらい融合した生活道路である。

道沿いのところどころで見受けられる、格子模様の古い町家の姿は、昔の風情を今に残している。そんな佇まいの、芥川の西国街道でもある。



明治・大正・昭和

古い物 買います

机・本棚・イス等、昔の家具
照明器具・扇風機等、昔の電化
品

その他・時計等明治・昭和の物
アンティーク・骨董 大歓迎です
古いお店の在庫品・什器・備品
蔵整理にともなう不用品
汚れていても、
少々壊れていてもOK
無料で出張見積もり致します
お気軽にご相談下さい

大阪市北区1-1-20

古物買取・販売

デモクラ

電話: 050-1222-5808

携帯 090-9788-3373

H,P: <http://demokura.blog85.fc2.com/>

江戸っ子エンちゃんの幼年期② 小学生のころ——昭和初期

エンちゃんの幼い頃は、ちょうど教育の覚醒期でした。尋常小学校六年制から高等小学校二年制で修了する人。中学校五年制へ進む人。さらに予科三年・大学四年制へ進む人などいろいろですが、大学まで行く人は少なかった。

尋常小学校は義務教育でしたからほとんどの児童が通いましたが、教育に対する人々の関心が高まってきて、多くの児童が高等小学校か中学校まで進学するようになります。女子は高等女学校五年制に進みました。その上は専門学校へ行くのですが、それ以上は進めません。大学は男子だけにしか進学が許されていなかったのです。

「産めよ殖やせよお国のため」という国の訓令が日中戦争の頃に出されたこともあって、子だくさんの家が普通でした。日本の人口を一億の大台に乗せるようにと、国は子供を産むことを奨励した。どの家庭も子供四、五人は当たり前、七、八人という家も珍しくありませんでした。親たちは、子供たちに何とか教育を受けさせようと努力し、「宝」である子ども親の期待に応えて頑張ったものです。エンちゃんは六歳のとき尋常小学校に入学しました。小さい時から泣き虫で、

学校へ行くのにも、お母さんがついて来てくれないとすぐべそをかいってしまう、そういう甘えっ子でした。

お母さんは仕方なく、手を引いて教室まで入り、エンちゃんをどうにか椅子に座らせます。授業が始まると、お母さんはそっと教室を離れる。しばらくしてエンちゃんは、教室のどこにもお母さんがいないことに気づいて、寂しくて悲しくて、先生のお話どころではない。下を向いて小さく泣き出してしまいました。先生は、「泣いている子がいるとほかの生徒に影響するので、お母さんしばらくいてあげて下さい」という。母は忙しいのに、エンちゃんのそばについていなくてはいけませんでした。

そんな事が半月くらいつづいて、ようやくエンちゃんは学校になれて、お母さんがいなくてもどうにか授業を受けられるようになりました。

小さい時はとんかく泣き虫で、エンピツが落ちて泣く、姉が何処かへ行こうとすると追いかけては泣く、そんな気の弱いエンちゃんは人頼みばかりの子でした。自分でも不思議に思うくらいの泣き虫だった。また身体が弱く、風邪を引いたり腹痛をおこしたり、いつもお医者さんのお世話になっていました。

学校にも慣れて病気もあまりなくなつた頃、四年生の一学期の頃だっと思いますが、エンちゃんにつらく当たって

泣かせてしまった姉に猛反撃したことがあります。いつもささいなことで泣くエンちゃんが、そのときは姉に「なんで、そー泣かすのよ」と飛び掛っていったのです。姉はいつものようにエンちゃんを振り回そうとするので、反対に姉を振り回してしまい、逃げる姉を追いかけてコテンコテンにやっつけて、泣かせてしまいました。仲裁に入った母のいうことも聞かず、姉をギャフンという目にあわせてしまったのです。姉は「ああ、怖かった」といって、それからエンちゃんをいじめなくなり、むしろエンちゃんのほうが姉より強くなっていました。そんな姉妹喧嘩もなつかしい思い出です。

今では、「なぜそんな遠くにお嫁に行つたの」と姉はこぼします。エンちゃんはきつと心の底で、姉の傍にいたら泣かされるのではない、大阪のご縁をなにげなしに受けてしまったようです。大阪のご縁は後日にお話しします。

父に鍛えられたお陰で身体が丈夫になったエンちゃんは、マラソンも大分早く走られるようになりました。運動会ではリレーの選手に選ばれるぐらい早く走れるようになったのです。エンちゃんは姉と学年代表のリレー選手になって、妹の持つていたバトンを姉に渡すとき、いっぺんに歓声が上がります。姉はとても走るのが速くて、コンパスが長く、「ああカッコいい」と思わず声を上げたもので

す。母も嬉しそうに身体全体で応援してくれました。

五年生になった頃、女子と男子がわかれてドッチボールの競技をしたことがあります。そのときエンちゃんが狙ってボールを当てた男子生徒が、東京で有名な実業家、森ビル創業者の森君です、森家は親子二代、東大の卒業生で、実業家になって活躍しました。「昔は隣同士だったのにね」と亡くなった母が言っていたことを思い出します。幼い時の友達が衆人の注目を集める有名人になっているという話を聞くのは楽しいものです。

エンちゃんの小学生の頃は、家の周りがどんどん整備されたときです。諸官庁が建設され、新しいビルが次々につぎに建てられて、街並みが大きく変貌していくときです。銀座へとつながる新橋駅の東側は新しい飲食店が軒をつらねるようになり、夜になれば電飾が煌々ときらめくネオン街となりました。

父は珍しい洋食店やレストランができると、自分が先に試食をして、気に入るとその店へエンちゃんたちを連れて行くのです。父は家族で食事するのが大好きでした。日曜日の夜は家族慰安日で、食事をして銀ブラをするのが楽しみでした。夏休みには一カ月間、海や山の避暑地に別荘を借りて、親戚の人達と楽しみました。あの楽しかった時代にもう一度戻ってみたいなあと思わしく思い出さ

れます。

父は思いがけなく早く亡くなりましたが、事あるごとにいろいろな事を教えてくれました。思案にあまることがあるたびに、父が何気なしに言っていたことを思い出します。その父の言葉に助けられて、エンちゃんは自分の人生を有意義に、明るく、豊かに過ごさせてもらっているんだなあと、しみじみ感謝しながら振り返っています。

~~~~~

### 投稿「川柳」

真本 嘉代子

- 梅まつり同じ思いの輪に溶ける
- 偏差値を戦い終えて桜咲く
- 遺伝子の存在映す孫の所作
- 好きな人大樹の陰にかくれんぼ
- 思い出を寝込んだ時の糧となす

### 読者からのたより

◇山猿さんには頭が下がります。大変でしようが頑張ってお世話して上げて欲しいと祈っています。雪ノ下のお話、私も参考にさせて頂きたいと思います。皆さん記憶がよく感心するばかりです。 Aさん

◇春を通り越してなんとも暖かい毎日です。毎月届く芥川だより楽しく読ませて頂いております。 Yさんの文章から今までの生き方、考え方がよく分かり、身心共に健全で、そのエネルギーに感服。私も、そういう風に齢を重ねていきたいと思えます。 Oさん

### 魚あれこれ

#### スズキ(鱸)③

周防 春日丸

海で生まれ、川で育ち、海に帰るスズキは海で生活する稚魚ばかりではなく、海から川をのぼって川や湖で生活する稚魚もいます。何故、川をのぼるのでしょうか。冬の季節に稚魚の餌となる動物プランクトンが汽水域よりも河川域の方が多いために餌を求めて川をのぼるのだそうです。

スズキの稚魚は川に入る前に身体の一部を少し変えなければならぬのです。海にいるときは血液の浸透圧は海水よりも低いので、水分が鰓(えら)や口から体外に取られるために常に大量の水を飲まなければなりません。これが川に入ると逆転して体内に水が進入することになるので、絶えず余分な水を排出していなければならないのです。

海で生まれたスズキの稚魚は海水を大量に飲むために塩類の取り過ぎになります。余分な塩類を体外に排出する必要があります。この仕事をしているのが鰓にある塩類細胞と呼ばれる細胞で、この細胞によって取り過ぎの塩分を調整しています。川に入るとこの塩類細胞は消えてなくなり、今度は塩類を取り込むための塩類細胞が現れてきま

す。この切り替え作業ができるまで海にいる稚魚は川に入ることできないので、河口四〇〇〜五〇〇日位過ごしてから準備万端、川に入って行くことになり

ます。島根県の松江では一〇月以降の雷のことを「スズキ落とし」と呼びます。これは宍道湖のスズキが雷鳴とともに海の深みに落ちてしまうからというスズキの生態をうまく言い表しています。

スズキといえは松江の奉書焼き——和紙の奉書紙を水に濡らし、魚体を二、三重に包み、旨みが逃げないように焙烙か天火で蒸し焼きにしたものを、煮返し醤油にモミジオロシを加えた辛口の適当なワリシタにつけて食べる——が有名ですが、中国では古くから「松江鱸魚」(しょうこうすずき)といって、上海の近郊にある松江の鱸が有名。黄河の鯉と並んで中国四大名魚の一つに数えられるとか。中国の鱸は古来より

の珍味であるがスズキとは全く違う褐色をした魚で、日本ではカジカ科に属するヤマノカミと呼ばれる魚で、その形相のいかめしいところから「山の神」と名が付いています。洗いのために存在する魚だとさえいわれるスズキの白く透き通った、すすぎ洗いをしたような白身を食べると暑さも忘れるほどの、夏を代表する白身魚です。

### 裏方さんいらっしやい。

広告スペースに空きが出てしまったのでスペース補填として二回目の登場となります。芥川商店街の近所に住む「パソコンよるず屋」です。今回はパソコン選びの小ネタ情報でも書きます

パソコンを新調される方からの質問で「どこのメーカーのパソコンがいいんですか？」とよく聞かれます。十万円以下の低価格機種から二十万円以上の高級なテレビつきパソコンまで多種多様で、選択肢が多く確かに迷ってしまうのですが、実際のところ内部の主要部品は、どのパソコンも自社以外の同じメーカーの部品を使用しているため横並びです。つまり、どれを買っても同じです。テレビつきとなるとメーカーテレビの性能差が若干でてきますが、それはパソコンの基本性能とは関係ないところです。また、中に入っているウィンドウズというソフトも同じであるため、メーカーによって操作が簡単かどうかはありませぬ。大手電機メーカーはラクラク操作ボタンや簡単ソフトで必死に簡単操作をPRしますが、利用者は逆にクラクラ混乱操作になってしまふのが実情です。



### 編集後記

九号を発行出来ました。皆さまのおかげです。春の桜を芥川堤で楽しむ日も近いと思っています。次号もよろしくお願ひします。(嘉)